

只見の自然を世界に向けて発信!

— 只見での研究成果を

地球環境保全の目標に—



▲生態系サービスの代表・ゼンマイ採り

▼つくば市の森林総合研究所では、平成20年度から3か年計画で只見町を調査地として、「森が人の生活にもたらす恵み（生態系サービス）」についての研究を進めています。

▼来年は、国連の定めた「国際生物多様性年」の年にあたり、「生物多様性条約締約国会議」という重要な国際会議が日本で開催されます。

▼今後、日本が担うべき責任を果たすにあたって、只見での研究成果が一つのモデルとなることをめざしています。

▼この中間発表となるシンポジウムが、来年1月23日、森林総合研究所の協力により只見町で開催されます。

▼プロジェクトがどのようないきさつで始まり、どのような目標に向かって進もうとしているのかについてご紹介します。

●地球環境問題としての生物多様性

1992年、ブラジルのリオデジャネイロで地球環境問題に関する国連主催の会議が開かれました。地球環境の大切さ、問題の深刻さが大きくクローズアップされた非常に大規模な国際会議でした。この会議でもっとも重要視されたのが「生物多様性」と「地球温暖化」です。それ以来、世界ではこの二つが地球環境の大きな課題として認識されています。しかし、地球温暖化に比べて生物多様性は今ひとつ関心が高まりません。それは、温暖化が比較的実感しやすいのに対し、生物多様性とは何か、なぜ大切なのか、がわかりにくいからでしょう。

●生物大量絶滅の危機

生物多様性はかなり漠然としたものであると正確に測ることはできません。想像を超えるほど多くの種が存在するだけでなく、微少なバクテリアからクマやカモシカなどの大型動物に至るまで、到底ひとくくりにはできないほど様々な生物がいるからです。しかし、一つの地域に住み続けていて、渡り鳥の数や川の魚が大幅に減るなど、全

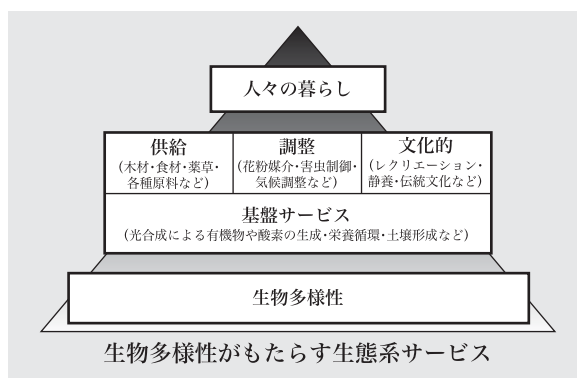
体として多様性が失われてきているということは実感できます。恐竜最期の時代以来の大量絶滅と言われることもあり、いざいざにせよ、絶滅速度が急速であるのは間違いないでしょう。そして、生息環境の破壊や在来種を駆逐する外来種などの影響によって、世界中で絶滅が危惧される種が急速に増えていることに対する危機感から、多くの国々で対策が取られています。

●生態系サービスとは?

私たちの生活は、多様な生物からなる生態系の働きの上に成り立っています。人がその働きによって受けている恩恵は「生態系サービス」と呼ばれています。これまで生物多様性という言葉は、多くの場合、絶滅が危惧される生物種を保護するという目標を念頭に使われてきました。最近では、なぜ生物多様性を守るべきなのか、その意義をよりはっきりさせなければならぬという認識が強くなり、生態系サービスに対する関心が高まってきました。森林の生態系サービスには、供給サービス（木材、食料としての山菜やきのこ、葉草、さまざまな原料などの供給）、調

整サービス（森林に生息する昆虫等による花粉媒介、多様な種

の存在によって特定の害虫の発生が抑えられるような働き、気候調整など）、文化的サービス（釣りや散歩などの楽しみや静養、伝統工芸などへの寄与）、基盤サービス（これらのサービスを支える生物の営み、たとえば光合成による有機物や酸素の生成、栄養循環、土壌形成など）が含まれます。



かつては日本中のいたるところで、これらすべての森林生態系サービスが十分に活用されていたと言えるでしょう。しかし、人と森の関わりが薄れつつある現代、とくに供給サービスは人々の生活から離れていきました。こうした中でも只見町の森林は四季にわたって、日常生活にお

いて豊かな恩恵を与え続けている数少ない地域の一つです。今回のプロジェクトが只見町をもっとも重要な地域と位置づけしている理由はそこにあります。

●「ポスト2010年目標」に向けて

折しも2010年には、名古屋で第10回生物多様性条約締約国会議（COP10）という大規模な国際会議が開かれることになりました。政府の関係機関がその準備を進めるかたわらで、

非政府機関や研究者の集まりが政府に対する働きかけを進めようとしています。この会議では、

今後の目標となる生物多様性についての国際的な取り決めについて議論され、「ポスト2010年目標」の採択が行われます。そこでは、生物多様性がもたらす生態系サービスがかなり重要なテーマになると予想されます。しかし、この分野の研究は日本では蓄積がきわめて少ないのが現状です。他の欧米先進国に比べて人が森林と身近に接し、利用する機会に恵まれているにもかかわらず、残念なことです。そこで、森林総合研究所が中心となり、「生態系サービス」に関するプロジェクト立ち上げの準備をした結果、環境省から比較

的大きな研究資金を得ることができました。これがきっかけで、その研究成果を世界に向けて発信することを目指しつつ、多くの町民の皆さまの協力を得ながら、プロジェクトが進められることになりました。「ポスト2010年目標」がどのようなものになるか、まだ定かではありませんが、生態系サービスについての研究成果がこの目標達成の度合いを測るための基準や指標に対してヒントを与えるようなものにしてほしいと考えています。

●只見の森がもたらす恵みについての研究

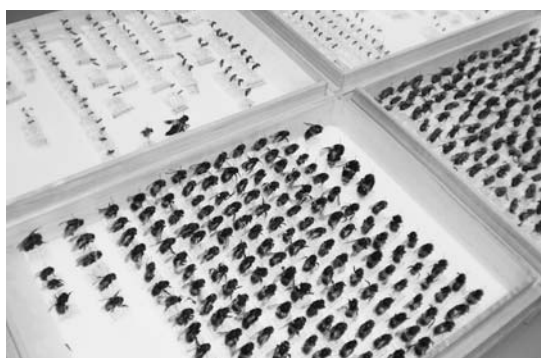
スギ、ヒノキ、カラマツなどの大規模な拡大造林が全国的に行われてきたにもかかわらず、南会津地域ではブナを中心とする広大な天然林が残っています。そこで、プロジェクトの目標として、第一に、天然林が生態系サービスの維持活用に大きな貢献しているのを確認しようとしています。第二に、野焼きや小規模な伐採などが古くから行われてきましたが、そうした人の森林への働きかけが無くなってきたことの影響を明らかにしたい、という目標があります。第三に、地域住民が主体となって利用と資源の保護を図ってきた、まさ

に只見町内の各集落で維持されてきた仕組みの重要性を来年のCOP10を機会に世界にアピールすることです。また、欧米では森林を利用する地域と原生的な状態で守る地域との間に明確な線引きをしようとする傾向があります。利用と保護が混然となりながらも、生態系サービスは持続的に活用されてきたこともアピールしたいと考えています。

このプロジェクトを進めるために、植物、昆虫、魚などの専門家のほか、社会科学の専門家も入り、生物の調査だけでなく、アンケート調査や森林利用の調査も行っています。今年もGPSという器械を町民の方々に付けてもらい、どのような環境で山の幸が豊富に採れるか、どれだけの量がとれているか、といったことを調べています。また、

アンケート調査では、どの時期にどの程度の頻度で山に出かけるか、資源を守るためにはどうしたらよいか、といったことをお尋ねしています。これらのデータをもとに山の幸がもたらす経済価値も計算する予定です。また、これらの動植物がどのような環境に多く生息しているかを調べています。その結果をもとに、森林をどのように維持管理すればよいか、明らかにしよう

うとしています。関東地方など、他の地域との比較もしています。人工林に比べて天然林が生態系サービスを支える生物にとってより良い生息環境を与えていること、人の利用に関しても天然林の方がより多様で、さかんに利用されていることなどが明らかになりつつあります。また、ソバ畑やリンゴ園などでの調査から、森林に生息する昆虫が花粉媒介や害虫のコントロールに貢献していることも少しずつ明らかになってきています。



▲町内で採集されたハナバチの仲間

ています。調査地の設定、データの収集など、積極的な協力がなければできないことばかりです。そこで、森林総合研究所が、今回のプロジェクトでどのような成果が得られたか、できる限り多くの方々に知っていただくために、シンポジウムを開催していただくことになりました。来年、1月23日に町内で開く予定ですので、ぜひご参加ください。

●只見町から世界にむけて発信

日本が果たすべき大きな役割は、「ポスト2010年目標」達成に向けて責任を持って活動していくことだと言われています。このシンポジウムは、只見町の豊かな生物多様性に関して行った研究成果を、この目標に向けてどのようにして貢献させていくか、議論していく良い機会です。これから町民の方々と南会津の森林に関わる仕事をされている方々と話し合っていく予定であるということです。

さらに、今年、来年と、朝日地区をはじめ、町内各所でアンケート調査が行われる予定です。生物関係の調査も含めて、引き続き町民の皆さまのご協力をよろしく願います。

●シンポジウムの開催

只見町の調査では、多くの町民の方々からご協力をいただい